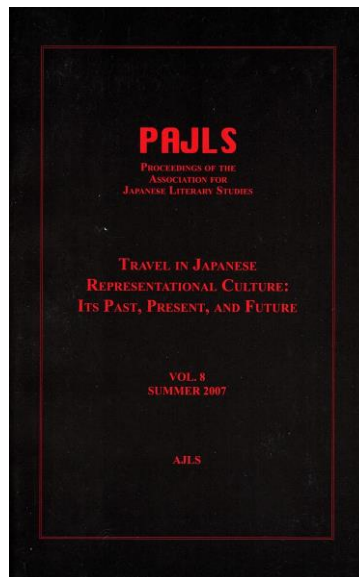


「宗祇と旅—歌枕・名所探訪を超えて」
“Journey of Sōgi: Utamakura/Beyond Visits to
Scenic Spots”

王 淑英 Sook Young Wang 

*Proceedings of the Association for Japanese
Literary Studies* 8 (2007): 47–55.



PAJLS 8:
*Travel in Japanese Representational Culture: Its Past,
Present, and Future.*
Ed. Eiji Sekine.

宗祇と旅—歌枕・名所探訪を超えて
JOURNEY OF SŌGI : UTAMAKURA/BEYOND VISITS
TO SCENIC SPOTS

王 淑英
Sook Young Wang

仁荷大学校
Inha University

はじめに

戦乱の世を生きぬいた宗祇（1421—1502）にとって、旅は生活であり人生であった。そして彼は旅を通して都の文化を地方へ、そして貴族から庶民へ、同時にまた地方の活力を都へと吹き込む、中世の文化伝道者の役割を果たした。

しかし宗祇は自分自身について多くを語っていない。旅について紀行文を残したのも『白河紀行』（1468年、48歳）と『筑紫道記』（1480年、60歳）のみである。その代り、彼は多くの旅の発句を残している。従って、宗祇の旅を考える時、『白河紀行』と『筑紫道記』のみでなく、その句集に残された発句は大変重要な意味を持つ。謎にまつまれている宗祇においては、彼が残した発句及びその詞書は無言の隙間を埋め、「連歌師として生きた血の通った姿」¹を垣間見せてくれる大事な材料でもある²。

同時に「発句」という形式そのものにも注目しなければならない。発句が独立して創作・享受されるようになるのは宗祇の時代あたりからであるからだ³。紀行文に和歌とならんで発句を採り入れるようになるのも、宗祇の『筑紫道記』からであった。『筑紫道記』以前の紀行文は漢詩が入る場合もあるが、和歌を挿入するのが普通であった。つまり発句が文化表象の大事な手段になり始めたのは宗祇の時代あたりからである。

1. 「時雨」の発句と流布された宗祇のイメージ

「笠を着て冷たい時雨に濡れながら旅から旅へと漂泊するわびしい旅僧」という宗祇像は、芭蕉によって強化され芭蕉の作品とともに広く知られ、かつ今日まで伝わって来たように思われる。あまりにも有名であるが芭蕉は「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、その貫道する物は一なり」（『笈の小文』）と西行と宗祇を重ね浮かべ、また「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上を生

¹ 金子金治郎『連歌師宗祇の実像』角川書店、1999、p 292。

² 奥田勲『宗祇』吉川弘文館、1998、p310。

³ 両角倉一『芭蕉の本4 発想と表現』角川書店、1970、p 124。

涯をうかべ、馬の口とらえて老いをむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」（『奥の細道』）という有名な一節においても芭蕉は「旅人」のイメージに宗祇を重ねている。そして

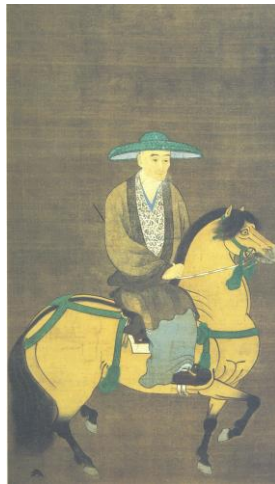
手づから雨のわび笠をはりて
世にふるもさらに宗祇のやどりかな（『虚栗』）

では宗祇の

思ふ事侍る比の会に、同じ心を
世にふるもさらに時雨のやどりかな（『菅草』『新撰菟玖波集』）

から「時雨」のかわりに宗祇を入れる破格さえ行っている。芭蕉には宗祇になぞらえることにより、自らを中世の行脚の伝統の中に位置づけようとした痕跡が随所に見られるのだが、その最たる例の一つがこの発句である。

この時雨の句と宗祇のイメージ創出などに関連させながら宗祇の肖像画をいくつかご紹介させて頂きたい。宗祇の画像は生前親交のあった景徐周麟の「種玉宗祇庵主肖像賛」に描かれたイメージ⁴



画1
(狩野元信筆、
ボストン美術館蔵)

出遊名區賈吟佛跨驢背
入坐燕寢陪嗜翁對遮斑

（旅に出て名所に遊ぶ時は、唐の詩人賈島が驢馬に跨った気分で馬に乗り、家にあつて居室でくつろぐ時は、黄山谷が愛用した遮鴝斑の香を薫じて、静かに対坐するのであった。）

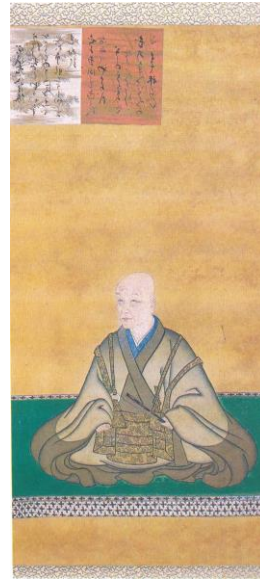
のように騎馬像（画1）と坐像（画2、3、4）がある⁵。

⁴ 上村観光編 『翰林葫蘆集』五山文学全集第4巻、五山文学全集刊行会、1936.

⁵ 島津忠夫『連歌師宗祇』岩波書店、1991。門脇むつみ『寛永文化の肖像画』勉誠出版、2002。赤澤英二「徳法寺蔵宗祇像について」『国華』1052号、1982 などによる。



画2
(岩手南部家旧蔵)



画3
(金子金治郎旧蔵)



画4
(岐阜 徳法寺蔵)

宗祇の坐像には画 2, 3 のように端座する像と画 4 のように脇息にもたれる像があるが、いずれも賛が付されている。まず画 2 は宗祇最晩年の寿像で、生前の宗祇の面影をよく写し留めているとされるものであるが⁶これには三条西実隆筆で

うつしをくも我かげながら世のうきをしらぬおきなぞうらやまれぬる
老木にもさかずやこころ花もがな
雲なき月のあかつきの空
さ夜まくら時雨も風もゆめ覚めて

と宗祇詠の和歌と発句、そして付句がそれぞれ一つずつ添えられている。画 3 は画 2 と賛を書く手法はおなじであるが賛に相違があつて

うつしをくも我かげながら世のうきをしらぬおきなぞうらやまれぬる
世にふるもさらにしぐれのやどり哉
としのわたりはゆく人もなし
老のなみいくかへりせばはてならむ

と歌は画 1 と同じであるが、発句及び付句は「世にふるもさらに時雨のやどり哉」と『宗祇終焉記』所収の付け句に入れ変わっている。そして画 4 になると

世にふるもさらに時雨のやどりかな
うつしおくはわがかげながら世のうきをしらぬおきなぞうら
やまれぬる

と付句はなくなり、しかも「時雨」の発句が先に書かれている。この脇息にもたれる宗祇像は歌聖人麿図をふまえたもので、江戸時代以降も多く作られている。そして江戸時代の宗祇像では「うつしをく」の和歌とこの「世にふるも」の句で賛が固定するようである⁷。和歌とともに発句が併記される手法が画像にも使われているのだ。宗祇の時雨の句が著名になるのはこうした画像の影響があつた。そして芭蕉が描く宗祇像、そして発句もこの画像からの影響が当然あつたであろう。

なお芭蕉の画像と比べて見る時、袈裟姿の坐像の形は共通しているが、芭蕉のように弟子を連れ歩く姿(画 5 など)は見出すことができない。ここでも旅人宗祇の孤高なイメージが創られていることがわかる。

⁶ 金子金治郎 日本古典文学全集『連歌俳諧集』小学館、1974、『宗祇の生活と作品』桜楓社、1983の口絵及び解説による。

⁷ 島津忠夫『連歌師宗祇』及び『俳諧大辞典』の「宗祇像」の項による。



画 5

(森川虚六筆芭蕉曾良行脚図、天理大学付属図書館蔵)

2. 名所と風景—伝統の確認と新たな発見

宗祇にはその最後の旅について門人宗長が書き残した『宗祇終焉記』があるが、宗祇自身による紀行文は冒頭にふれたように『白河紀行』と『筑紫道記』二つしかない。小品である『白河紀行』と違い、『筑紫道記』の旅は大内正弘への謝意と政情報告といった政治的・実用的な目的もあったが、両方とも「国々の名ある所みまほしく」と歌枕や名所旧跡を訪れる事を主目的とした旅であり、⁸ 時雨にぬれながら足任せの漂泊をするというイメージは殆どみられない。白河へ行った時は「案内者として若侍二騎が随行」しており、筑前を訪れた時はもっと丁重な扱いで大内家関係の重要人物をはじめ、地方の名士たちの総出の歓待を受けている。

関東流浪時代の小品である『白河紀行』が山岳中心の旅であったのに対し、『筑紫道記』は海浜眺望を特色とする旅であった。二つの紀行文は形式の上でも注目すべき違いをみせている。『白河紀行』は文中に和歌6首を収め、巻末には連歌百韻一卷を付しているが『筑紫道記』には和歌20首と同数の

⁸ 金子金治郎『宗祇の生活と作品』同『連歌師と紀行』などによる。

発句を収め、紀行の日にも 36 日間と歌仙連歌の数に合わせ連歌的構成を見せるなどさらに創意的である。

二つの紀行文中、ここで注目したいのは『筑紫道記』である。なぜなら『筑紫道記』では発句という形式が強く意識されており、「名所」に対する言及もあるからである。

発句は

月にみつ夕しほさむし秋の海（豊浦）
おくりきてとふ宿過る時雨哉（隼人の迫門）⁹

のごどく景観描写に使われ、また

ひろくみよ民の草葉の秋のはな（筑前国守護代陶弘詮館）

のように眼前の風景に教訓を含ませた句にも使われている。

和歌とともに発句の形を使用することで「和歌では述懐・叙情の面を、発句では叙景および叙景的挨拶を詠む」というふうにならざるにそれぞれの文学的性格によって形の使いわけをしているようだ¹⁰。

次に「うつら浜の条」をみていただきたい。

旅の空はいつとなく、世のことはりの物うきながら、世々のふるごとなどにも思ひ

なぐさめ侍るを、あひぐしたるものどもの、ひとへに浪風の愁へののみうちなげくを聞きても、我ゆゑにこそと思ふもあぢきなし松原遠くつらなりて、箱崎にもいかでおとり侍らむなどみゆるはだぐひなけれど、名所ならねばしひて心とまらず。やまとことのはの道も、その家の人、又は大家などにあらずばかひなかるべし。然るをこの度所々にして瓦礫をつらぬる事甘首におよべり。あるは敬信の心、あるは此の道のねがひ、あるは我が身の思ひをのべ、或はいにしへのなき世の跡をあはれば、又は所につけて佛忘れがたきにもよほさるる成るべし。俊成卿の筆の跡にも、此の国にきたりときたれるものは、此の歌をながめ、如此の国に生まれと生まるるものは、此の歌をよめりといへり。またいきとしいけるものいづれか歌をといへる事侍れば、しひて身のいやしきをはづべきにあらずや侍らむ。

⁹ 両句とも山口下向中に著した『発句判事』所収のものである。

¹⁰ 金子金治郎 『宗祇の生活と作品』櫻楓社 1983 202ページ及び同『連歌師宗祇の実像』角川書店 1999 192ページ

「うつら浜」について景色としては心引かれながらも「名所ならねばしひて心とまらず」と簡単に退けている。宗祇が名所の伝統を重んじている事を示す一節であるといえる。しかし、「やまとことのはのみちも、その家の人、又大家などにあらずばかひなかるべし」と続く部分と最後の「しひて身のいやしきをはづべくやあらむ」などと関係付けて考えるとまた別の見方も可能である。これについては金子金治郎の「名所に登録されていなくても、それが素晴らしい風景であるかぎり、無視できないのではないか、長年の旅の中で、こうした経験も数多かったに違いない。それが遠慮がちではあるがここに出ているとおもう。」¹¹を引用することに留めて置きたい。しかし、この「うつら浜の条」の言及にはなぜ宗祇が「発句」という形にこだわったのか、その答えの一端が隠されて入るようだ。

3. 旅の発句から読み取れるもの

宗祇の旅の発句は彼の自撰句集である『菅草』（50代）、『老葉』（60代、初編、再編があり、旅への関心が表れている句集）、『下草』（70代）、晩年の『宇良葉』（発句のみ）、そして『新撰つくば集』『宗祇発句判事』『名所句集』¹²などに入っている。特に注釈が施されているわけでもないので分類や内容、時期把握など容易でない。従って宗祇の旅の発句を時期別に厳選し、発句によって宗祇一生の旅をたどろうとしている金子金治郎の『宗祇旅の発句注』（私家版）¹³は大変貴重な資料となる。具体的な検討はこれからの課題に譲り、簡単な概要及び内容を紹介したい。

『宗祇旅の発句注』は150句からなっており、次のように大きく六つの時期に分類されている。

- 1) 旅立つまで：初期一文正元年（1466）10句
前半生不明
- 2) 東国の旅：文正元年（1466）—文明5年（1473）41句
『白河紀行』
「世にふるもさらに時雨のやどりかな」
- 3) 西国の旅：文明12年（1480）—文明13年（1481）29句
『筑紫路記』
- 4) 越路の旅：文明10年（1478）—明応6年（1497）30句
7回、旅の記録を残していない。
- 5) 畿内の旅：文明5年（1473）—明応8年（1499）30句
『新撰菟玖波集』
- 6) 旅の終わり：明応8年（1499）—文亀2年（1502）10句
『宗祇終焉記』

¹¹ 金子金治郎 『宗祇の生活と作品』櫻楓社、1983、206ページ

¹² 両角倉一 『宗祇連歌の研究』「第2章自撰句集の形成」（勉誠社、1985）など参照

¹³ 『宗祇旅の発句注』東海大学連歌研究会、1994.

宗祇の前半生は不明な所が多いので当然初期の句は少ない。頻度が高く滞在も長期に渡るが旅の記録を残していない越路の旅については、詞書などに基ついで宗祇の旅を具体的に再現しようと試みている。また、発句の詞書、即ち補足としての注釈にも注目したい。それには付け句と違って、宗祇の旅、生活、心情などを垣間見せてくれる多様な内容が含まれているからである。例えば、お祝い、権力者に対する教戒、遣明貿易船の成功記念などもこのなかに縮約されている。同時に彼の旅が時の権力と切り離しては考えられない性質のものであった事実も証明している¹⁴。

次に『宗祇旅の発句注』から発句及び注をそのままの形式でいくつか紹介させていただきたい。特に「越路の旅」では越後が歌枕に乏しい国であった事がかえって新鮮な目でスケールの大きな海洋の句を詠む事を可能にしており、そしてそれはそのまま宗祇の発句の世界を代表する句にもなっていると思われるので、2句を取り上げたい。

越中小津にて

雪になみかへりて涼し越しの海（『老葉』、『宇良葉』）

〔自処〕 夏、魚津市

〔句意〕 寄せては返す荒波です。あるいは雪のように白い波頭となり、あるいは青い水に戻ります。この単調な繰り返しの何と涼しいことでしょう。ああこれこそが越の海の涼味なのです。（「越路の旅」8）

若狭小浜にて侍りし会に

ふりのぼれ山松近き波の雪（『宇良葉』『宗祇発句集』）

〔時処〕 冬、福井県小浜市

〔句意〕 山松、海に向かって枝をのぼしているのですが、海の波は白い波頭を雪のように泡立てて、松の枝にはげしく吹きつけています。もっと降りのぼるがいいと思うような、すばらしい波の勢いです。（「越路の旅」23）

初冬の心を

めぐりきてかげもしぐるゝ月日かな

（『宇良葉』『宗祇発句集』）

〔時処〕 冬、摂州（『実隆公記』明応4年11月10）

〔句意〕 月も日もめぐるものであり、時雨もまた山めぐりなどといって循環します。この月日と時雨が、たがいに循環する間には、時雨のた

¹⁴ 川添昭二『中世文芸の地方史』。「宗祇の見た九州」平凡社、1983.

めに月日の曇ることもあります。しかし、めぐり合いですから、離れて月日の明らかになる時の必ずあるはずです。(「畿内の旅」23)

三つの句とも大変スケールがおおきく単純な構図でありながらのびのびと「永劫への回帰」の世界が詠われている。文学的聖地である歌枕の呪縛や文化的記憶からも解き放たれ、旅を繰り返すことによってさらに純化された世界が詠まれているように思われる。

4. 結び—新たな読みの可能性

歌枕・名所探訪は旅をとおして文学を再生産する実践であり、文学においては伝統的に重要なものであるとされていた。一方、宗祇にとっての旅の「発句」は新しい風景、心惹かれる風景を書き残したい願望の無意識な現われでもあるように見える。だからこそ伝統を受け継ぎながらも、それを超える魅力が宗祇の旅の発句の世界にあるのではなかろうか。そして宗祇が好んで詠んだ「時雨」や「波」に象徴される、めぐりめぐる循環の世界はそのまま旅、連歌、そして人生の「実践」に繋がるものである。

「乱世を旅した漂白の詩人」そして「俗世の権勢と密接に結びついた政治性の伴う文化人」という相反するイメージが時代によって絶えず作り続けられてきた宗祇にとって、発句というスタイルは時代を表象する新たな文学手段であった。そして宗祇の「発句」というテキストに新たな読みを加えて行くのはこれからの仕事のように思われる。今後の課題としておきたい。